

緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- ワーキングツアー座談会 P 2
- 黄土高原の土を踏んで考えたこと ... P 4
- チコロナイの現状と今後の方向 P 7



内モンゴルに接する陽高県の守口堡村。村の中を万里の長城がはしる

1995・5

36

春の黄土高原ワーキングツアー第2班は、いままでの参加者のなかでも最高齢の副島文枝さん（74歳）が参加、好奇心にあふれた若々しさにはみんなが脱帽しました。第1班からとおして約3週間、ワーキングツアーにつきあってくれた通訳の王黎傑さんもまじえた座談会のようなすをご紹介します（4月13日、万寿賓館にて。記録・文責：東川）。

●今村藤三郎（会社役員） 子どもたち、あんずたち、かささぎたち、すこやかに育ててください。子どもたち、あんずたち、かささぎたち、再び会う日を楽しみにしています。

この仕事は息の長い仕事なので、次の世代が早く↓

ことではなく何十年単位のことですぐいと言ってくれる人もいます。今回、副島さんにもお会いできて、私もまだまだ、と勇気づけられました。

●副島文枝（無職） ありがとう、いい出会いをしました。黄土高原が見たいという気持ちがほとんどで来たけれど、土沙漠と聞いて、遠山先生が砂沙漠、土沙漠、塩沙漠とおっしゃった、↓



陽高県乳頭山村で、アンズを植えた後に水路から水を入れる。この水は内モンゴルからトンネルをとって来た

1995 春のワーキングツアー座談会第2弾

想像を超えるツアーでした

この活動をみんなにひろげよう

ありがとうございます。

今回のツアーですけど、出発前に十分なことはできないと思っていました。お客さんですか



気温は零下、雪のちらつくなかで村人と苗木を植える。天鎮県下營堡村にて

迎えてくれるようにしていただきたい。それは、王さんや、大同のスタッフや、私たちの仕事です。

●中野紀子（看護婦） 去年の夏はとてもいい体験ができたので、ぜひまた、と思っはいたのですが、まさか今回参加するとは…。違う季節で、雪景色も見れた。草がなかったらなんにもなくて、植林の大切さがよくわかりました。

GENのことを日本で話すと、わかってくれない人もいるけど、1～2年の

これが土沙漠かと勉強しました。あんずの花の咲くころ、また来たいですね。みなさん、王さん、ありがとう、お元気で。

●東川 このツアーはいつもそうなんですけど、いろんな人が参加していろんな話が聞けて、すごく勉強になります。聞いたこ

とを全部覚えておけたらいいんだけど…。

大同のスタッフともだいぶお馴染みになってきました。ぜひまたみなさんとあんずの花を見に来ましょう。

●土代啓子（元公務員） まず、王さんに、ありがとう。たいいてい通訳は、こういう仕事はいやがると思います。都会から農村の不便なところに行ってくれて、

ら。列車の遅れや天候のせいもあったけど、現地の人々の苦勞の1%ぐらしか経験できない。1か所に1週間ぐらい滞在しないと。

でもいろんな場所に行けて、ホテルだけではなく、ヤオトンに泊まって、一般庶民の家に行けて、一部分理解できたと思います。

●高見 昨年春の団と前の団はよく働いたんです。日本人はだいたい、瞬間風速はすごくて、わーっと働いて、ぼろがでないうちに移動する。次の日はあちこち痛かったりしますが。

農家の食事も、前の団でホテルの食事を違う場所で食べているだけだと言われましたが、これが中国のもてなし



地球環境林センターの起工式で礎石を埋める



かたですので堪忍してください。

●土代 以前、別のところで、あぜ豆が枯れるぐらいのすごいひでりなんだけど、すっぽん料理とかでてきたことがあります。中国の習慣ですね。ずっと言いつづけると、変わるかも。米↓



ワーキングツアーでは今回はじめて、大同の万人坑を訪れた

も小麦もとれない土地に行くのよと言ってきたので、ごちそういっぱい食べてきたというのは...、困ったな。

●榮元保洋(アルバイト) 楽しくて勉強になりました。...こういうの苦手なんで...。ぜひまた、王さんのきれいな日本語を聞きに来ます。

●太田和徳(団体職員) 軽い気持ちで参加したけど、中国のナマの姿を見てよかったです。これからは、仲間に声をかけて、会員になってもらって、それだけじゃなくてツアーにも参加してもらおうように、積極的に働きかけたい。

みなさん、王さん、ありがとうございます。

●有元幹明(元公務員・団長) 高見君とは20年ぐらいつきあいがあり、この仕事のことは3年半前に聞いて、「そんなこと」と思っていたけど、実際にやりだして、動きだしたなど思いましたね。必ず行くと約束しました。仕事があるうちは無理だから、定年になったらすぐ行くと約束して、今回実現したわけです。

想像を超えるツアーでした。意義のあることをしているということをおぼろげに労働の間に感じました。これはみんなに広げないといけない。ライフワークにするということをおぼろげに書いて

てしまったし、実行しないといけませんね。王さんとの出会いも素晴らしかった。これからもよろしく。

●高見 私は今日は日本大使館で公使の下荒地さんに会ってきたんです。新任の大使が来たばかり、村山首相が2

週間後に来るというのでごったがえしてたんですけど、1時間半ぐらい時間をとってくれた。ここまで農村に根が張れたのはすごいと言ってきて、これからは何かあったらできるだけのことはするからと言ってくれました。環境問題はこれからのキーになる、日本と中国のこれからの関係の作り方も、地球環境林

センターの起工式のメッセージに書いてくれたとおりで、こういう関わり方が大切だと。

●王黎傑(通訳) 高見さんが黄土高原で緑化運動をやろうと言ったとき、あんなへんぴなところまでできるのかと疑いをもっていました。93年の末、日経新聞の鹿児島さんについてはじめて黄土高原の土を踏んで、感無量でした。こんなところが中国にあるんだと。同時に大変だと思いました。去年の春はワーキングツアーについて労働して、みんなよく働きましたね。地元の人も感激していました。

普通の代表団についたら、都市のホテルでごちそうを食べて、うわべは楽しいけど、あくまで仕事だけです。みんな卵みたいにカラに閉じこもって、突っ込んだ話はできない。今回は緑化の仕事で、労働もしたし、特に第1班はお風呂にも入れず大変だったけど、いつも同じテーブルを囲んでいるんな話を打ち解けてできてよかった。

仕事としてではなく、楽しみながらやっているのだから、負担はありません。普通は日本人は遠慮がちで、だからこちららも遠慮してあまり親しくなれないけど、こういう代表団は楽しいし、これからもこういう活動は続けていきたいです。

1995・夏 黄土高原ワーキングツアーに行こう!

今夏のワーキングツアーは、はっきりいっておすすめです。それに、実をいいますと「この夏は行くからね」という声、すでに数人からいただいているんです。でも、昨夏は2班出せたツアーも、今年は他団体からの訪問団が多いので大同事務所の受入れ能力を考えると1班しか出せません。ひょっとすると今夏は「狭き門」かも?

夏は植樹に適さないので、正直いって木は植えられません。そのかわり、早朝のすがすがしい空気のなかでの果樹園の中耕や、地球環境林、小学校付属果樹園予定地の整地など、作業はほかにもありますし、アワ、ジャガイモ、ヒマワリ、菜の花などの畑のパッチワークが見られるのは夏ならではの。

長城の村や、自然保護区も訪問の予定です。立花吉茂団長による黄土高原の植物のお話も楽しみです。

●日程 7月25日(火)～8月4日(金)
※関西新空港発着

●費用 22万円、学生20万円(航空運賃、中国での宿泊費/食費/交通費、ビザ取得手数料、GENの会費1年分を含む)

※先月号のお知らせから費用に変更がありました。

●締め切り 6月30日

●定員 20人(先着順)

※航空便のつごうで、日程が変更になるばあいがあります。

■お問い合わせはGEN事務所まで。

TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739



黄土高原の土を踏んで感じたこと

春のワーキングツアー第2班団長 有元 幹明（元公務員）



見渡すかぎり広がる黄土色の大地。深くきざまれた侵食谷、「耕して天に至る」段々畑、土が流されて岩肌を露出した山。黄土高原の典型的な風景

「何故に黄土高原に行くのか?」、それぞれの思いは違っていたかもしれないが、はじめて顔を合わせた8名（高見事務局長は第1次の団から大同に滞在、現地地で合流して9名に）が第2次のワーキングツアーに参加した。

74歳の副島文枝さん、63歳の今村藤三郎さん、20歳の栄元保洋君、25歳の太田和徳君と年令的に幅の広い男女4名ずつのユニークな団である。

上海で入国手続きし北京へ着いたころには意気も合い、2時間遅れて出発した夜行列車の4人部屋ではうちとけあうまでに。

列車は1000m高いところにある山西省・大同へ6時間あまりかけて、ゆっくりと走りぬけていく。

早朝、窓外の景色は一変していたのに驚く。100kmは見ただろうが、黄土色のそれこそ樹木1本もない山並みが延々と続いているのである。これは想像を越えていた。

定年後の人生を「黄土高原に緑を!」という環境保全事業に少しでも役立てることができれば……、それは息の長い、それこそ子々孫々までつないでいくべき事業であり、植えた樹の成長は見届けられなくてもいい、「結果を求めない仕事はセコクならないから残り時間の少ない自分にはピッタリだ」なんて考えていたことを反省しなければならぬ。

しかし同時に「イヤア、これはデツカイ仕事だ」「こんな大プロジェクトのためには、協力体制の裾野をしっかりと広げなければ!」という決意にも似た思いが強まったことも事実だ。

今回のツアーが、大同市南郊区平旺村に造る実験区「地球環境林センター」の起工式に合わせて設定されたこともラッキーだった。

黄土に適した樹木や野菜・穀物を求め実験していくこのセンターが具体化したことは、「緑の地球ネットワーク」（大同市では「緑色地球ネットワーク」の名で大きく評価されている）の緑化協力事業がしっかりと「戦略・戦術」をもっていることを証明していると見た。

天鎮県では下營堡村小学校付属果樹園での果樹植樹、「万里の長城」が村の中を貫く陽高県乳頭山村小学校での杏の植樹作業、渾源县西留郷に造った「緑の地球ネットワーク宿泊所（ヤオトン）」での交流と宿泊など、大阪府の9倍近い広さの大同市の各県をマイクロバスで移動するツアーであったが、各地の青年たちが日本の協力に大きな期待を持っていることを痛感し、この事業の重要性をかみしめることとなった次第である。

また、途中、40年前毛沢東主席が提唱した時に植えられた“小老樹”の林を見たが、土が肥沃になっていたのには感激した。年々歳々葉を落とし、水

を溜めることになったからで、緑化とはスタンスの長い事業であることを実感した。

中国五岳の1つ「恒山」に登り、絶壁にある「懸空寺」に遊び、有名な「雲崗の石窟」の古代巨大石仏に感嘆し、「大同万人坑」に日本の侵略時代の蛮行の史実に申し訳ない思いに心を痛め、充実した「ツアー」を終えたのであるが、観光の要素も入れた1週間ほどの「ツアー」は、今回のように誰でも参加できるから、多くの人たちに呼びかけていきたいものである。

GENの会員に なってください!

いつもGENの会報『緑の地球』を読んでくださってありがとうございます。会報購読者のみなさんに、お願いします。会員になってください!

GENの運営は会費によって支えられています。広がる緑化協力を支えるためにも、国内活動を活発にするためにも、事務所機能の充実が必要です。

会員のみなさんも、周囲の方に「こんなことやっているとがあるよ」とビデオなどを利用して紹介して、会員、会報購読者の輪をひろげてください。みなさんのご協力をお願いします。



黄土高原の農村事情

～ひとびとの暮らし～

高見 邦雄 (GEN世話人)

天鎮県買家屯郷李二烟村は、黄土丘陵にある貧しい村です。昨年夏のワーキングツアーが、アンズを植えるための整地作業にとりくみました。

91年から3年つづきの干ばつで、93年の1人あたり年間所得は100元（1元≒10円）前後でした。94年は雨に恵まれ、ひと息ついたのですが、95年は春節（旧正月）くらい1度も雨が降っていません。最後に降ったときも、土の表面が2cmほど湿っただけでした。黄砂が風で舞い上がり、ちょっと先が霞んでしまいます。この地方の民謡に、「10年のうち9年は干ばつ」と歌われていますが、おおげさでないのです。

82歳の老人の話では、干ばつがいちばんひどかったのは1958～60年で、アワを皮ごとカコにしたけど、それも底をつき、野草を根っこまで食べたといっています。谷底の湧き水も涸れかけ、水を求めて歩き回りました。餓死者はそう多くなかったものの、乞食になって村を出た人はたくさんいました。いち

ばんいいのはいまだ、とにかく食べれるんだから、とのことです。

若い男にとって深刻なのは、嫁日照りです。この村で結婚しようと思うと、3万元、1家の年収の10年分もお金がかかります。半分が結納金になり、家を直したり、衣類、自転車、電機製品などを買う必要があります。

この村からも、いま20名ほどの若者が大同の炭鉱などに出稼ぎに行っています。都会は生活費も高いけど、収入が月500元にはなるので、5～7年働いて、結婚費用にするのです。

娘2人、息子2人を結婚させた女性に、結納はもとが取れたでしょう、と聞くと、そんなことはない、娘はちょっとはましな村にやりたい、そうすると結納金は600～700元だけだった、不公平だけど、水のない、交通の不便な村なんだからしょうがないよ、と。

いま東部沿海部と内陸との格差が大問題になっていますが、内陸部間でも自然条件の格差があり、社会的要因

がそれをさらに拡大する傾向があります。小さな範囲での格差の拡大は、より深刻な問題を生みかねないのですね。

土地のよくないところに干ばつが重なると、10aあたりの穀物収穫高が20kg未満といったこととなります。アンズは乾燥に強いので、収入は10倍以上になる、と強い期待が寄せられます。

緑の地球ネットワークの緑化協力はこの村でも歓迎されており、植えたあとの水やりのためにバケツなどが準備されていました。谷底の湧き水をロバや人手で運ぶというのです。

「日本は経済が発展してるそうだから、村ごと日本に連れてって欲しくないか」「いいよ、日本は土地が狭いから、土地ごときてくれるんだったら……」集まった人たちが大笑いしました。

信じられないような厳しい環境で、笑いを忘れない、ほんとうにたくましい人たちです。あのアンズたちがちゃんと育って、最底辺の村の底上げに役立ってほしいものです。

山西省の自然

石原 忠一

(92年緑化協力団団長)

(29) 小老樹 = 小葉楊 (Populus simonii)

柳科の楊族は北半球温帯に約35種が知られていますが、『中国高等植物図鑑』（1972年）には14種も図説されています。ちなみに日本での原生種はハコヤナギとドロノキだけです。

小葉楊は河や溪流の両岸と平原地帯の海拔2,300mまでにみられ、条件がよければ高さ20mにも伸びて、建築材として有望なのですが、なにしろ山西省は乾燥の激しいところです。『山西省自然地図集』（1984年）によりますと、大同で年間降水量400mmなのに、年間蒸発量は2,000mmとあります。

こんなところでも、根毛の表面の細胞膜から植物体内にとりこんだ水は、生きた細胞から細胞へとすみずみまで

広がり、絶妙な生命現象を支えて、葉の裏側の気孔を嚴重に調節して、干からびてしまうことに耐えています。だから、小葉楊は防風・固沙・保土の働きがあり、緑化樹種として注目されてき



大同市の小老樹の林。根元の土はよく肥えている

ました。

高見君の報告によりますと、桑干河流域の平原地帯のあちこちで人の背丈かせいぜい3～4mのヒョロヒョロと曲がった密植された低い林の広がりか残っているといっています。土地の人たちは冷やかな情感をこめて「小老樹」と呼んでいるそうですが、すでに40年もたっているというのです。一時は植被率0.9%まで落ちた大同市近くの荒野を、

なにがなんでも緑の復活をと苦勞をした先輩たちの遺産ですが、それでも樹下一面は黒々と腐葉土に覆われているとのことです。果樹園に切り換えたり、ふたたび畑作に変わるところもでてきたといっています。

小老樹の林をどう評価したらいいのでしょうか。おおいに論じてほしいものです。

アイヌモシリでの森林回復

ナショナル・トラスト チコロナイの現状と今後の方向

武田 繁典 (GEN世話人)

チコロナイの運動は、2年間の調査研究、準備のあと、昨年12月10日に開始されました。北海道平取町二風谷の貝澤耕一さんと私たち、『緑の地球ネットワーク』が常に連絡を取り合い、相談しながら進めています。さいわい各種の新聞やミニコミなどでも紹介され、大きく輪が広がっています。4月末まで、寄付をよせられた人が202人、寄付金の総額は3,131,870円になりました。第1期計画として呼びかけたのが、3月末までで300万円が目標であったので、一応これが達成されたこととなります。

運動に参加された方々をみると、以前から先住民族、特にアイヌ民族に関心をもち、心を寄せていた人たちと、自然保護、森林回復の面で何かをしたいと思っていた人たちが多くいます。地方別にみると、北海道はもちろん、全国に広がっています。近畿7府県で

ほぼ半分、あと北海道、関東、九州の順に多くなっています。「大阪の団体がなぜ北海道の森林回復を？」とよく聞かれますが、北海道の自然とアイヌ民族に心を寄せている人たちが日本全国にいることがよくわかります。アイヌ民族と、そうでないいわゆる和人ととの関係の歴史を知れば、「関係ない、関心ない」ではすまされないことは一目瞭然です。チコロナイの運動をとおして、アイヌ民族との共生をめざす輪が全国に広がることを願っています。

達成された300万円余りの寄付金の使用法ですが、森林の保全契約として、故貝澤正さんが遺された山で話を進めています。また土地買い取りとして、1ヘクタールでもいいからまず第1期として確保しようとの計画は、いろいろな問題があって、まだうまく進んでいません。対象地をいろいろ探しているのですが、山林を売買するには金額

が少なすぎて難しい点があります。しかしなんとか打開して、夏ごろまでには結論を出したいと思っています。その後、秋ぐらいから、第2期計画を開始する予定です。

募金活動以外では、8月の現地宿泊研修会ワーキングツアーは昨年につづき、第2回を貝澤さんをはじめ二風谷の方々のご協力をえて実施します。また大阪では、チコロナイ関係の学習会を毎月1回おこなうことになりました。来年2月には少し大きな講演会も計画しています。輪を広げていくとともに、私たちもじっくりと腰をおちつけて勉強していきたいと思っています。ふるって参加されることを呼びかけます。

なお、第1期計画の募金活動は継続していますので今からでもお寄せください。

郵便振替 00900-2-52024 チコロナイ

チコロナイ現地研修 第2回 二風谷ワーキングツアーのお知らせ

昨年は9人が参加、東大演習林では原生林に圧倒され、二風谷周辺のきれいに木を切り倒された山には情けない思いをし、アイヌ民族の暮らしに学んだ6日間。今年も、“チプサンケ（舟おろし祭）”をはさんと、ワーキングツアーを実施します。

昨年末からのチコロナイ第1期計画も順調に進み、200人をこえる協力者の輪ができました。すでに輪に入っている人も、これからの人も、現地で寝食をともにし、手足を動かし、汗を流して体験しながら、交流しましょう。

●日程 8月18日（金）～23日（火）

18日：午後2時JR富良野駅前集合、東大セミナーハウス泊

19日：東大演習林見学、二風谷へ移動、平取温泉泊

20日：チプサンケ（舟おろし祭）参加、博物館等の見学、キャンプ泊

21～22日：交流、周辺の森の見学、山仕事、畑仕事、木彫り・ししゅう体験など、二風谷荘泊

23日：午前11時二風谷にて解散

（活動内容は天候などにより一部変更するかもしれません）

●費用

集合から解散まで1人5万円

（宿泊、食事、交通費、講習・研修費、保険料等。現地までの交通費は別）

●定員、締め切り

約10人、7月10日（ただし定員にたっしだい締め切ります）

●お申込み・お問い合わせはGEN事務所、または武田（TEL/FAX. 0727-634171）まで。

右：東大演習林で原生林を学ぶ（昨年のワーキングツアーで）



『チコロナイ』ひろがる輪

協力者からのメッセージ

アイヌ民族と私
伊東 容子

私は小学生のころ、教科書でアイヌ民族のおばあさまの写真を見ました。いま思うと、アイヌ民族に対する悪意に満ちたその教科書と私自身の心の中にある罪で、私はまことに粗末な心の中の世界に住んでいました。そして、以後30年あまり、私の見識の中でアイヌ民族は過去に存在した民族であり、アイヌモシリは最初から日本のものであったのです。

歴史教育を受けない日本人、歴史を知らないどころか事実を誤認させられている『内地人』としての私の生活は、在日朝鮮人の真の姿に気づいたときから大きく変わりました。そしてアイヌ民族の存在に気づき、その文化や歴史に理解が深まるほどに、私は日本人としての数々の不幸から心が抜けだしました。

GENのニューズレターを読みだしたとき、自然相手に自然を中心にして、自然から人間社会を正していくのは、なんとさわやかだろうと心を打たれました。

この度、私が編集に加わっている『海峡』に武田繁典氏より文をいただき、『チコロナイ』のキャンペーンを紹介させていただきました。

私は、『海峡』を日本が天皇教・企業・新興宗教が主流の文化から解放されることを願いつつ刊行しております。

いまの日本は問題があふれています。大人の世界を敏感に表す子ども社会で人を死に至らしめる人権侵害が横行するの国文化がドンづまりにきているのを証明しています。

21世紀に向けて、私たちは高い知性と良心をもつ文化を創りあげていきたい。それにはアイヌ民族が頂点となり、『内地人』を先導していただきたい。

貝澤様ご一族のご活躍とGENのご発展を心より願っております。

(注：「内地」という言葉は、戦前か

らの悪の文化がなにひとつ改められていないという私の認識からあえて使いました)

『海峡』申込み先：

〒650 神戸市中央区多聞通 3-3-7 コウベセンタービル9F パルム英語研究所 (切手190円分を同封して申し込んでください)

日本の農業を憂う
高橋 正伍

私は1945年、自分の育った農村に戻って妻の母親の土地を借りて百姓をはじめるといふ僥幸を得て今に至っているが、1961年に生涯私の農業の師と仰ぐ人との出会いがあった。

その師の説くところは、日本の農業がそのまま進むと亡国の道をたどることになる。耕地の砂漠化が進み、収穫量は頭打ちになり、食糧不足におちいる。しかも生産物の栄養価は低く、加工食品添加物と農薬の体内への摂取により国民の健康は危機的になる。と聞かされた。この頃は日本経済の高度成長の波がざわめきはじめた頃である。経済の成長にあわせて政府は同じ頃農業基本法を制定した。

この法律は化学肥料と農薬と機械化省力を主軸としたもので、経済の急

成長に農業が遅れないよう、農民に夢を与える目的もあったかも知れぬが果してどうであったか。ここで見逃しできない点として、農業においては大義であるはずの土づくりの概念を基本法では切り捨てているのである。堆肥が内蔵している価値や諸機能をまったく無視した。基本法は一方的に肥料は化学肥料のみと断じた。農基法は“地力”の根源である土壌微生物と総称される特殊技能者の集団、小さな生きものたちに対して、化学肥料の硫酸と殺し屋の農薬をさしむけたのである。

政府は全国に約10万人の中央農試、農業改良普及員、生活改善普及員、および地方自治体の担当者を配置しているが、作物の病虫害被害はますます増え、難病奇病はおとろえを見せず元気である。大量投下される化学肥料その他の金肥が分解(酸化)吸収されることなく、年毎に蓄積を重ね、残留毒性とか、塩基蓄積の害とか、まるで他人ごとのように語られている。これほど酷い農地の環境破壊はないのに、全農以下各単位農協はもっぱら営利団体そのものである。自分で自分の土地を営々と努力して駄目にしてしまった農民はいちばん哀れかもしれない。そしてまた、このように死にかかった土地から生まれた“もの”を食べてもらっている消費者の皆様には心底申し訳なく思っています。

(日本有機農業研究会北海道グループ 微生物総合農法北海道事務局)

ビデオ『黄土高原に緑を！』

言葉だけではわからないってこと、ありますよね。会報でもできるだけ写真をつかって黄土高原の様子を紹介していますが、ワーキングツアーの参加者のみなさんから、「会報の記事は読んでたつもりだけど、これほどとは思ってなかった」という声を聞くにつけ、筆力と印刷メディアの限界を感じてしまいます。

実際に現地を訪ねるのにはおよびませんが、映像を見ることによってかなり理解を深めることができます。「こんなふうには木を植えるんだ」「えっ、このにごった水が村の命綱の泉なわけ？」などなど、一目瞭然。現地の人たちの熱意が、画面をとおして伝わってきます。ひとりでも多くの人に見てほしいのです。

黄土高原に緑を！ ビデオ作品・28分・カラー

定価 5,000円 会員価格 3,500円 郵送料 390円

環境庁・環境事業団 地球環境基金制作協力／文部省選定／大阪府・京都府・大阪市教育委員会推薦／中華人民共和国駐日本大使館推薦／(財)大阪国際平和センター推薦

チコロナイ学習会ってどんな雰囲気？

円満堂 修治 (GEN世話人)

5月13日、土曜日、第2回チコロナイ学習会をGEN事務所でおこないました。予定時刻の5分前にはすでに16人、そして最終的には18人の参加者となり、予想をはるかに上回りました。ほんとうに喜ばしいかぎりです。

さて、内容の方かというと、この会報でもおなじみの武田さんによる「チコロナイの趣旨と現状、そして今後について」でした。まあ、今回はそれはちょっと棚の上に置いておきましょう。それよりも参加者のみなさんに「なぜこの学習会に？」という動機を語っていただきましたので（自己紹介がいつのまにかこうなっていました）、ここにいくつかを紹介しようと思います。「昔から山が好きで、自然に対して傲慢になりたくない」「ネイティブピープルに興味があり、日本の先住民、アイヌ民族のことを学びたい」「自然が好きだけど何もできない。でも少しでも緑がふえたらすばらしいな」「先住民の問題、...それはひとことで言えば私たち自身の問題」「踊りに興味をもって、アイヌ民族の踊りから、アイヌ民族の問題を考えるようになった」「こういう問題に心ひかれるもの

があった。これから勉強したい」「実際に行動することに意義があると思った」

...どうですか？ みなさんほとんどが初対面の方ばかりなのに、この前向きさ、この真剣さ、そしてこの力強さ。どうやらこのナショナルトラスト『チコロナイ』は、ただ森を買って守っていく運動だけでは終わりそうになくなってきました。...まあこれはちょっと大げさだとしても、この運動をとおり、いま日本がかかえる問題、とくに先住民のこと、そして壊滅状態になりつつある自然破壊のことを、いろんな方向から話し合えるのではないかと期待しています。

今後もこの学習会を月に1回おこなっていく予定です。かたい話は極力さけて、楽しくざっくばらんに、そしてちょっとまじめにいろんなことをお互いに学んでいきたいと思っています。興味のあるなしに関係なく、よかったら顔をだしてください。待っています。...P.S. チコロナイ学習会についての質問や希望、また提案等ありましたら右記円満堂(えんまんどう)まで連絡してください。お気軽にどうぞ。

『チコロナイ』学習会のお知らせ

- 日 時：6月10日(土) 16時～18時
- 場 所：GEN事務所
- テーマ：『イヤでもわかるアイヌ語』 —アイヌ語に秘められたおもしろい話、深い意味—

連絡先：円満堂修治

TEL/FAX. 078-592-8466 (夜9時以降)

※連絡先が変わりました。

編集後記

トキのミドリが死に、残された卵も孵化しないと判明しました。ニッポニア・ニッポンという学名をもちながら、日本産のトキは絶滅してしまうことが、これで確実にになりました。

リョコウバトの最後の1羽はマーサという名前の雌で、動物園で死んだそうですが、日本産のトキの最後の1羽も雌のキン、やはり飼育下で孤独な最期をむかえることになります。

トキが絶滅しても私たちの生活には影響ない、と言われればそれまでなのですが、朱鷺色という色があるようにごくありふれた鳥だったトキを、たかだか100年ちょっとの間に絶滅に追い込んでしまった日本の文明っていったい...と、考えてしまうのです。(東川)